

日本語文化研究Ⅱ ことのはじめ

古典作品に於ける「古注釈」研究の領域とは

―現代漫画&アニメーションの手塚治虫作品集―

萩原 義雄

日本語の時代区分を知ろう

上代じょうだい 文化〔奈良時代〕

← 〔天平時代〕

中古ちゆうこ 文化〔平安時代〕八世紀の終わりから一二世紀初め 794年

律令政治の時代

摂関政治の時代

← 〔院政時代〕

中世ちゆうせい 文化〔鎌倉時代〕

← 〔南北朝時代〕

〔室町時代〕

〔安土桃山時代〕

近世きんせい 文化〔江戸時代〕

← 〔幕末時代〕

近代きんだい 文化〔明治・大正時代〕

←

現代げんだい 文化〔昭和・平成時代〕

※歴史学では、「上代」と云わずに「古代」と総称する。

時代毎に見える古典作品の書名を知ろう！

1, 上代文化

『万葉集』『古事記』『日本書紀』『古語拾遺』『高橋氏文』

2, 中古文化

『懷風藻』『文華秀麗集』『經国集』『性靈集』『菅家文集』
『将門記』『日本靈異記』

『竹取物語』『伊勢物語』『大和物語』『平中物語』『宇津保物語』

『新撰万葉集』『古今和歌集』『土左日記』

『和漢朗詠集』『宇津保物語』『蜻蛉日記』

『枕草子』『源氏物語』『紫式部日記』『和泉式部日記』

『大鏡』『榮花物語』『堤中納言物語』『更級日記』

※院政期の文化

『今昔物語集』『梁塵秘抄』『打聞集』『古本説話集』

『法華一百坐聞書抄』『極樂願往生歌』『往生要集』

3, 中世文化

※鎌倉文化

『保元物語』『平治物語』『平家物語』『愚管抄』『神皇正統記』

『十六夜日記』『海道記』『とはづがたり』

『千載集』『新古今和歌集』『金葉集』『山家集』『小倉百人一首』

『方丈記』『徒然草』

『吾妻鏡』『正法眼藏』『歎異抄』『蒙古襲来絵詞』

※南北朝期の文化

『太平記』『曾我物語』『庭訓往来』

※室町文化

『謡曲集』『狂言記』『風姿花伝』『御伽草子』『義経記』

『菟玖波集』

『狂雲集』『中華若木詩抄』

※安土桃山文化

『伊曾保物語』『醒睡笑』『甲陽軍鑑』『昨日は今日の物語』
『田夫物語』

4, 近世文化

『五輪書』『三河物語』『奥の細道』『雑兵物語』

※上方文化

西鶴『好色一代男』『好色一代女』『日本永代藏』
近松『油地獄』『曾根崎心中』『國性爺合戦』

※江戸文化

『假名手本忠臣蔵』『義経千本桜』『菅原伝授手習鑑』
『浮世風呂』『雨月物語』『南総里見八犬伝』『東海道中膝栗毛』
『柳樽』『北越雪譜』『蕪村句集』『一茶集』『良寛集』

5, 近代文化

※開化文化

『西洋道中膝栗毛』『八十日間世界一周』
『航米日録』『世界國盡』
特命全權大使米欧回覧実記』

※明治の文化〔言文一致の文化〕

『小説神髓』『五重塔』『浮雲』『たけくらべ』
『舞姫』『青年』『雁』『渋江抽齋』
『坊っちゃん』『吾輩は猫である』『三四郎』『明暗』
『破戒』『金色夜叉』

※大正の文化

『河童』『ふらんす物語』『人間失格』『斜陽』
『細雪』『刺青』

6, 現代文化

※終戦文化

『伊豆の踊子』『雪国』『金閣寺』『夏の闇』『恋人の森』

※現世文化

☆小説部門

『ノルウェイの森』『キッチン』

☆漫画・アニメ部門

手塚治虫作品集

『火の鳥』『ブラックジャック』『リボンの騎士』

『鉄腕アトム』『ブツダ』

マンガ作品約七〇〇タイトル（原稿枚数約一五万枚）、アニメ作品約七〇タイトルという膨大な作品を創出



《今回の課題目標》

ここに、取り上げた日本文芸作品資料のなかで、最も身近に位置する漫画・アニメ部門をここに設定し、この部門のなかで数多くの作家人を現代今でも輩出しつつけているが、二〇〇九年生誕八〇周年を迎えた手塚治虫さんの作品における注釈書が実際に編むことができるのかを探ることで現代作品の注釈の製作が可能なかを考察していくことになろう。その手始めに、四月一日（土）から六月二一日（日）まで展示が予定されている江戸東京博物館の特別展「[手塚治虫展](#)」[未来へのメッセージ](#)」に自ら足を運び、その展示資料を観賞し、必要なパンフレットなどの入手を図り、画像取込についても現況はどうあるのか？これを基軸にして、ご自分で手塚治虫作品を幾つか選択し、その内容をもって自らが手塚治作品についての注釈作業を実行していくことになる。

<http://www.edo-tokyo-museum.or.jp/kikaku/page/2009/0418/200904.html>

http://www.nhk-p.co.jp/tenran/20090418_101712.html

そこで「注釈」とは、そこに描き出された事物や文章に一体どのような内容が秘められているのか、この内容についてあらゆる角度から検証することで私たち人類が何を求め続けているのかを学習することにも繋がっていくことであろう。この授業の最終章には、ここで扱った幾つかの作品対象は、そのもの自体が実在する報告資料として、世界各国のMANGAに関心を抱き、探求する人々に公開していくことでその達成率を確かめて見ていこうではないか……。

次回の予告

手塚治虫ワールドへ



<http://tezukaosamumagazineclub.com/?gclid=CiHO55f775kCFQMdewodYExoRw>

手塚治虫二〇〇九

<http://www.nhk.or.jp/tezuka/>

「M Wームウー」動画 http://jp.real.com/ads/mail/09/0406/movie_001.html

<http://mw.gyao.jp/> 公式サイト

(『ウィキペディア (Wikipedia) より引用) 『M Wームウー』

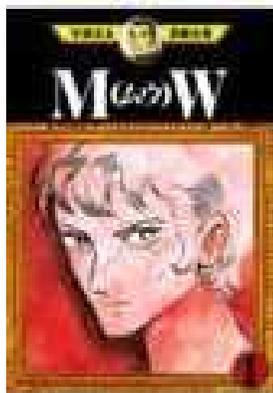
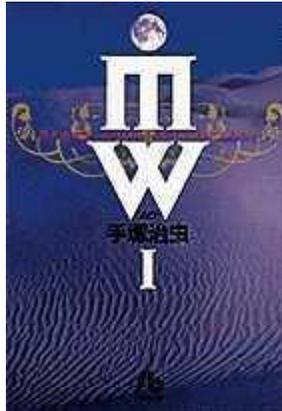
梨園に生まれたエリート銀行マン・結城美知夫の素顔は、狂気の連続凶悪犯罪者だった……。

犯行を次々に重ねては、その後に教会を訪れ、旧知の賀来（からい）神父のもとで懺悔をする結城。しかし二人は、同性愛者として、肉体関係を結んでいた。ある。かつて結城は、少年時代に南国の沖ノ真船島を訪れ、この地の不良少年グループにひどくかわかされた経験をもつ。その際、同島に駐留する外国軍の秘密化学兵器 MW（ムウ）から毒ガスが漏れた。島民が相次いで変死する地獄絵を目の当たりにしたトラウマと、自らも毒ガスを吸ったショックとから、結城は心身を蝕まれる。そして、不良グループの一員だった賀来の手で、凄惨な場面から逃げおせたのもつかの間、避難先で賀来に強引に犯される結城少年。主従関係は変わっても、二人の奇妙な関係はその後も続いていたのだった。

自分の心身の健康を奪われた結城は、当事者への復讐として、数々の誘拐事件と猟奇殺人を繰り返した末に、MWを奪い、全世界を自分の最期の道連れにしよ

うとたくらむに至る。それを阻止し、結城を救済すべく動き回る賀来神父の苦悩と、救済と改悛を拒否しながら加速度的に愉快犯を重ねていく結城の姿が描き出された、一大ピカレスク・ロマンである。

『MW ムームー』（フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）より引用）



手塚治虫の“禁断の問題作”「MW ムームー」が映画化

手塚治虫が遺した作品の数々は、日本にとどまらず世界のあらゆる分野に影響を及ぼし続けている。

その中で発売当時、内容の過激さや、荒唐無稽さから、“禁断の問題作”“映像化は不可能”と言われてきた「MW ムームー」が、生誕80周年のこの年に、ついに映画化される。生誕80周年のこの年に、ついに我々の前に現れる。



【近年公開された手塚治虫作品】

二〇一〇年 生誕一〇〇年に向けて

二〇一一年 アニメ映画「ブツダ」 <http://www.ws.warnerbros.co.jp/buddha/>

二〇一二年 「地上最大の手塚治虫」展 世田谷文学館於

<http://www.setabun.or.jp>

二〇一四年 アニメ映画「ブツダⅡ」

「BUDDHA2 手塚治虫のブツダ―終わりなき旅―」公式サイト

<http://www.buddha-anime.com/>

「ビルドゥングス・ロマン（主人公の内面的な人間形成の過程を描いた作品）」ドイツ語の *Bildungsroman*（ビルドゥングスロマーン）の訳語で、自己形成小説とも訳される^[2]。この概念はドイツの哲学者ヴィルヘルム・ディルタイが、ゲーテの『ヴィルヘルム・マイスターの修行時代』を中心に、それに類似した作品群を指す言葉として使用したことによって有名になり、以来特にドイツの小説における一つの特徴を表す言葉として知られるようになった。「ウィキペディア「教養小説」より」